

令和3年度 こころのケア シンポジウムの開催

兵庫県こころのケアセンターの日頃の研究成果の発表と、「コロナ禍のメンタルヘルスへの影響」についてのパネルディスカッションから成る、こころのケアシンポジウムを開催しました。

- 1 日時：令和3年12月2日（木）13：30～16：30
- 2 場所：兵庫県こころのケアセンター大研修室及びオンライン配信
- 3 参加者数：医療・保健・福祉・教育関係者や自治体職員など約200人
- 4 内容

開会に当たり、加藤寛センター長が、シンポジウム開催の趣旨を含め、あいさつを行いました。

その後、桃田茉莉子主任研究員が、「PTSD症状を呈する対象者における日常生活上の実行機能の問題」にかかる研究報告を行いました。今回の研究報告の「実行機能」とは目標を達成するために適切な行動の選択を可能にする能力であり、PTSD症状を呈する対象者の睡眠習慣、日常生活上の実行機能の関連について、トラウマ体験がある成人を対象に調査を実施し、その結果をもとに現状分析と考察を報告しました。

次に、パネリスト4名からの発表とパネルディスカッションを行いました。

まず、田中恭子・国立成育医療研究センターこころの診療部児童・思春期リエゾン診療科診療部長から「コロナ禍を機に再考するこどものメンタルヘルスとその支援」をテーマとして、教育・保健・療育・医療・福祉施設等の閉鎖が子どもの心身に影響を及ぼしている現状に関する説明や、国立成育医療研究センター社会医学研究部・こころの診療部を中心とした研究者・医師有志の集まりによる「コロナ×こどもアンケート」の調査報告がありました。また、コロナ禍における子どものトラウマ医療について何ができるのか、大人に求められる姿勢、心理支援のあり方などについて述べられました。

続いて、当麻美樹・兵庫県立加古川医療センター副院長兼救急科部長から「新型コロナウイルス感染症患者受入病院におけるメンタルヘルス：アンケート調査から見えてきたことー現場の苦闘・組織の苦悩ー」をテーマに、感染症指定医療機関における症例や院内対応、また、院内感染防止に最も大事なこと、第1波・第2波における問題点等が述べられました。そして、兵庫県立加古川医療センターで働く職員全員を対象にした「COVID-19対応に関するメンタルヘルス調査」の結果報告と、アンケート結果からみえてくるもの、職員を守るために重要なことは何か、次なるパンデミックに備えて必要なことは何かなどが述べられました。

さらに、原田奈穂子・宮崎大学医学部看護学科精神看護学領域教授からは「最前線で働く保健医療従事者の質的研究について」をテーマに、コロナ禍の最前線で働く保健医療従事者＝フロントランナー（以下、「FR」という。）の抱えるストレス状況や、ストレスに対するどのような取り組みをしていたのかについての研究報告がありました。研究の結果では、新興感染症がFRの仕事内容そのものを大きく変化させ、家族や職場への二次的影響を及ぼしていたこと、救急領域や歯科のFRは感染予防に関する知識と技術があるため、他領域のFRと比較するとコントロール感を保持していたことなどが述べられました。

そして、加藤寛センター長からは「コロナ禍における支援者のメンタルヘルスを考える」をテーマに、コロナ禍で従事したダイヤモンド・プリンセス号での支援活動の状況報告や、その他にはコロナ禍における保健師の苦悩や第5波当時の保健所の状況、自然災害とコロナ禍における保健師の活動の比較についての報告などが行われました。コロナ禍で医療保健関係者が受ける影響は、災害時の惨事ストレスと同じであるという認識を持つこと、については惨事ストレス対策が重要であること、そして社会全体で関心を払い医療保健関係者をサポートすることが必要であることなどが述べられました。

引き続き、パネルディスカッションでは、「罹患された方のメンタルヘルスの影響」についての状況やご意見等を伺いました。また、第6波に向けた準備としてどのようなことが今後できるのかについてのお考えを伺いました。

今回のシンポジウムでは、COVID-19の対応に関するメンタルヘルスについて、各研究結果や保健医療従事者の実情を深く理解するとともに、医療保健分野にとどまらない、社会全体での支援・努力が求められることが強く実感できる有意義なシンポジウムとなりました。